

猪犬と登る猪猟の頂点へ

猪猟の上級編 ①

田宮 治

頂点を極める

「猪猟で頂点を極める」といえば、誰でも「猪猟で名人になることだ」と思うはずである。私もそのつもりであるが、「猪犬と登る」と前置きしたところに、私なりの猪犬に懸ける重要な意味を強く暗示したかったのである。

古代より「将を射んと欲すれば先ず馬を射よ」との格言どおりで、「名人を得ようと欲するならば、まず第一に犬を得よ」と言い換えたのである。

猪猟の頂点あたりの激戦では、獵人だけが、どんなに頑張ったところで完勝できるわけではない。一戦一戦を確実に勝ち続け、登り詰めて頂点に立つのは当然のことだ、一流犬群の不動の戦力がなく

てはならない存在となるもので、猪犬たちは考えられないほど重要な役割を果たしているのである。

猪猟では「名人が先か、名犬が先か」という議論は聞いたこともないが、世にいう「卵が先か、鶏が先か」の論議と同じで、どこまでいっても結論は出ないと思う。

とは言っても、議論の味は大変重要であり、自分なりに納得の結論を出さないことには、とても先には進めないし、頂点にも立てないと思っている。

そのことは全く自由な発想でよいと思うが、猪犬はやはり獵人（主人）が作るものだと思われている。しかし、どんなに頑張つて名犬を作ろうと思つたところで、出来上がる猪犬の芸域は、主人の獵技術を超えたものには決してならないのである。

かつて、私も「犬さえ良ければ……」「このバカ犬が……」「あと少しだったのに……」と、悔しい思いをしたものだが、いま考えてみると、猪と見事に戦い抜けないバカ犬こそが、猪猟に写し出される。

基本的には人間は考えることで物を推し進め、より良いものを完成させることができるが、犬たちは考えることではなく、人が教えること、つまり訓練されたことを

ただ忠実に覚え尽くすのである。決して裏切ることがなく、ただ一筋に主人に尽くす犬たちは、訓練によってどんな猪犬にも仕上げられるのである。激戦の戦いぶりで分かるように、犬たちはいつも命懸けで主人に尽くすのである。

だからこそ、私は犬たちが可愛

くて仕方ない。話せない彼らの目の開かないうちから「よし、よし」と話しかけ、名前を呼び続けることで、簡単な言葉は覚えさせている。

「待て！」「行って来い！」「やめろ！」などは、猪猟に必要な主人の一方的な命令であるが、猪犬はこの命令に、死も恐れず勇敢に戦い通すのである。

猪猟人ならば、こんなことは分り切ったことだと思っていた。最近、仔犬の縁で全国の多くの猪猟人と巡り合い、猪犬感や猪猟法を聞かせてもらっているが、人それぞれ考え方で、実に驚いたり感心したりしている。

人の意見や獵法までも感動し、受け入れられる柔軟な考えを持ち合わせているうちは、その人の成長や進化は続いていくだろう。逆

に、自分の考え方が正しく、決して人の話を聞き入れない自称名人というのは問題である。

仔犬の育て方や仕上げ方は、誰もが独自の方法でやっている。そして、猪犬感も人それぞれでよいと思うが、猪犬完成の話になると、猪の攻め方から始まりきちんと止め置く完成度まで、あまりの違いに驚かされるのである。そんな猪猟の上級編をここで記述したいと思っている。

では、どうしたらきちんと止める一流猪犬ができて、その犬群を見事に使うことで猪猟や猪犬の頂点にたどり着けるのか。このことを、私の体験してきた猪猟の実戦の中で、最も良い方法や一番の近道について発信したい。

なんとか分かっていたら良かった、全く独断専行の俺流猪猟法ではあったが、山彦会千葉支部での一秋は上々の成果で、会員の成長は心から納得できるものになっている。あと来期一秋も頑張れば、必ず一廉ひととせの若大将たちが出来上がってくるはずである。その一戦一戦の戦いぶりをお伝えしていくこ

とで、全国の悩まれている猪猟人の福音となればと思っている。

しかし、簡単に一流犬群とか名犬といってみただけで、猪犬作りは一秋や二秋で結果の出る世界ではない。

何度も何度も言ってきたように、猪猟は犬次第である。見事な一流芸の犬たちが揃ってさえいれば、猪猟は八割方は成功したようなもので、人様にその戦いぶりを見ていただければ分かってもらえる。残る二割は、獵人がきちんと獵知識を持ち合わせていることで、そうでないことには、満点の猪猟はとてできない。

つまり、猪犬は名犬であり、獵人は達人でなければ、猪猟の頂点とか上級編などは論外のことである。どのように結論づけようと絵空事である。

当然のことながら、そんな理想論も、努力と挑戦によって揺るぎない現実的な最高の猪猟の頂点にたどり着けるのは、達人が名犬群を見事に使いこなした場合だけである。

どちらが先とか後ではなく、この両者が並び立つことが重要である。車の両輪のようにうまく具合に絡み合い協調し合ってこそ、見事なまでに猪猟道のだ真ん中を突進し続けられ、堂々と頂点に立てるのだと思う。

二番じゃ駄目ですか？

達人、名人、名犬、一流芸などと繰り返しているのは、一番が大事であって、二番では駄目だということである。

私の推し出す猪犬作りや猪猟法の中で、私がくどいほど説明している名犬や名人は、はっきり言って二番では駄目だと思っている。ある事業仕分け人が得意気になつて言いきって大反響になった、「二番じゃ駄目ですか？」という名言？がある。

良いか悪いかは別として、いやしくも国政を与える者が、超一流の大型コンピューターだけでなく、素晴らしい芸術・文化や外交に至るまで、もしも「二番でもよい」と言って国作りをしたとすると、

いったいこの国はどうなるのだろうか。コンピューターの世界では、少なくとも十年は後れをとるだろうと、学者が反論していた。「一番でありたい」「最高であり続けたい」と思う強い信念が、夢を実現のものとするうえで大切なことであり、その強い挑戦心が、最高のものや人格まで育て、作り上げていくと私は思っている。

もし、私が並の犬たちで、たまに猪が獲れる程度の猪猟法をどんなに力説したところで、人は見向きもしないし、何の役にも立たないだろう。

物事の完成や達成は二番でよいと思った時点で、三番どころかビリにもなる可能性があり、全く見通しのきかない、ボヤけた目標を持つことになるのである。

そんな目標はないに等しく、追ってみても決して良い結果は出ないはずである。物事の完成や大事な進化・改良であっても、一番早くて良い道は探し当てられないのである。

私は何も「達人だ」「名犬だ」と威張ったり誇張したりしているの

八ヶ岳、長野の山々は高く険しい。この
猟場も例外ではなく、鹿ばかりで猪は少
なくなつた



群馬の猟場。鳥獣の頃から通い慣れた榛
名町中室田辺りの山々。やはり猪は少な
くなつている



山梨の水口から望む猪猟場。最近めつき
り猪が減少し、代わって鹿がその数を増
やしている。昔の良い猟場はどこも鹿ば
かりである。そんな中で猪だけを狩れる
猪犬でないと、これからの猪猟は成り立
たない



ではない。まして自慢するために
戦っているでもない。

一戦一戦を全力で戦うことで、
猪猟での一番良いと思っている真
の戦いぶり、どんな激戦でも必
ず完勝できる猪猟人の役目を分か
つてもらい、本物の猪犬としての
実力を生で見たい。だからために戦
い続けているのである。

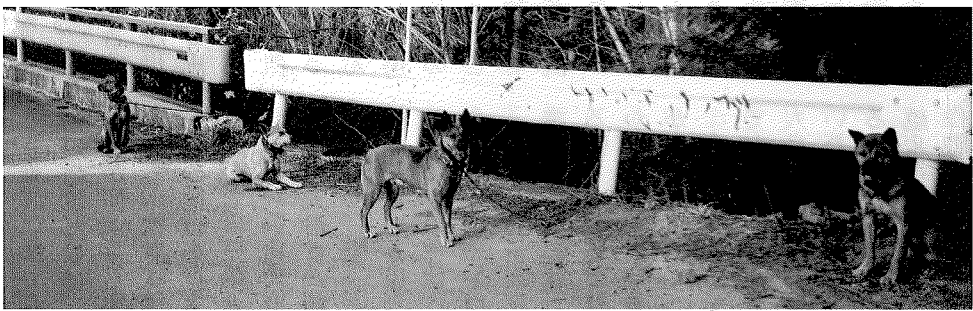
そして、一生懸命に頑張り続け
れば、誰でもこれくらいの猪猟人
になれるし、名犬群だってぞっく
り仕上げられるようになる。必ず
できるという信念でやり続けてい
れば、誰でも簡単にできるという
ことを発信したいのである。

人の目に留まり、やってみたい
と思わせるような技術や芸域に到
達できるようになるには、並外れ
た一流のものでなくては駄目なの
である。どこにでもある三流のも
のでは、何の意義もない興醒めし
たものになる。

そんな思いから、私が追い求め
てきた夢の猪犬とは、毎回実戦で
示しているとおりで、「これぞ咬
み止めだ！ 何か文句あるか！」
とうそぶけるような超一流の猪犬



(上) 単独猟で仕留めた一五〇^キの大物。犬たちの実力がそのすべてである。このくらいの猪になると、腸だけで二〇^キくらいはある。だから抜いて引き出す以外にないのである



(下) 単独猟で猪が獲れる犬群(右から竜号、ミス号、初代シロ号、アカ号。猪猟を始めた頃から好きな山で、今でも通い続けている山梨の赤芝沢にて)



ありし日の名犬コンビ(鳴き止めのクマ号、足取り名犬のラン号)。忘れられない数々の名勝負を私に残してくれた。もうこのようなコンビは作れないと思っている

やっと一人で猪と勝負して勝てるメンパーになった。右のカンジキは、郷里の村上市山熊田の大滝剛氏の父親(新潟マタギ)が私に作ってくれたもので、雪道はこれに限る(右から上段は竜号とミス号、下段はチヒロ号と奈智号)。

芸である。

そして、その犬群を見事に使いこなす獵人は、当然二番では駄目で、名実共にすべての獵法を兼ね備えた名人でなければならぬ。

しかし、かくいふ名人とは、私が教えてこれから育ててくれる若者たちの将来の雄姿であり、次世代に繋げてくれる指導者として出来上がる期待の名人のことである。したがって、私はまだ名人気取りでいるわけではない。

この年になっても、あと一踏ん張りして、さらなる高嶺の月を追い続けたいのである。猪犬作りの野望は私の人生を懸けた、それこそ人様には言えない苦勞の連続であった。やっとつかみ取った一流猪犬の完成はその一步である。

その道を登り続けて、慣れ親しんだ近道に乗って、犬たちと一緒に若者たちを道連れに猪獵の頂点を目指し頑張ってきたのである。

ある年には、名のある親方たちの猪獵に参加して、そのやり方や犬群の実力を見聞し、ここでの良いものは当然のことで生かして使い、明日に繋げてきた。

「人のふり見て我がふり直せ」

という諺のとおりである。どこまで登っても良いことは取り入れ、悪いことはすぐやめることが大切である。なかでも自分で決めた不動の信念だけは、どこまでも貫くことが何よりも重要である。

いろんな意味で企画した猪犬の三秋の挑戦を見事に乗り越え、わが犬舎では兄弟犬三胎（三組）の素晴らしい猪犬群が完成した。

その犬群と一緒に登って来た頂点までの一戦一戦をありのままお伝えしたいと思っているが、私はこれからの一秋こそが、まさに正念場だと思っている。

なぜかと言えば、とかく人間は誰もが持ち続けている自尊心があるが、その先には本人さえも気付かない自惚れがあり、達人気取りがある。

本物の実力になる束の間であっても、この達人気取りこそが、名人になる頂点付近での一番やっかいな、成長を阻害する事柄である。人格を傷つけずにうまく乗り越えさせるには、実戦以上の心理作戦となるのである。

何事にも、人はこれでよいと自己満足した時点で、残念ながらその成長は止まるものである。その辺の感情と心理面を大切に、すんなりと頂点になんとか導きたいものである。立派な猪獵人として、また指導者として、どうしても完成させたいのである。

当然、人は一番であり続け、頂点を極めて名人になるには、いかなる時でも飽くなき探求心と挑戦心が大切である。どんなに登り詰めたとしても、その心根は絶対に忘れてはならない大事なことである。

我慢のオフシーズン

何十年やってきても、鉄砲撃ちほど調整期間の厳しく難しいものはない。

一般的なスポーツでは、オフシーズンは極めて短いのだが、狩猟は長い。九カ月もある。地域によつては害獣駆除の名目で報奨金まで支給され、年中優遇されているところもあるようだ。私のような都市部に住んでいる獵人は、いくら望んでも住所を移さない限り

り害獣駆除隊には入れてもらえない。したがって、大好きな狩猟を楽しむ期間は、冬のわずか三カ月だけである。

同じ獵人でありながら些かの不満も残るが、それだけに、この三カ月を充実した獵期にして納得できる成果を残すためには、長くて暑い、苦しいオフシーズンを何としても頑張り通さなくてはならないのである。

オフシーズンは、誰もがホッと一息ついて休みたいものである。しかし、何年も繰り返して、獵を知り尽くした獵人ならば、当然のことながら、この厳しいオフシーズンがどのような意味を持つものかを十分に心得ているはずである。

人も犬も若いうちは一年間体験すればそれなりの知識が積み、技術や犬芸も成長するが、私のように年をとってしまうと、現状維持さえ大変なことである。

山を歩くことでさえ毎日欠かさぬ精進が必要となってくるのである。ましてや、来獵期の目標となる上級編で猪との戦いに完勝するためには、一流犬群作りから始ま

って、猪犬群に適切な指示をしなから、勢子役と移動タツを完璧にこなせる私自身の調整がまず必要となる。

また、来獵期、山彦会千葉県支部の若者たちを必ず頂点に立たせるための確かな道案内ができるように頑張らなければならない。

このように、オフシーズンは大変重要な充電期間であって、獵人であれば誰でも、夢の計画の実現に向けて邁進していくことは当たり前のことである。

過ぎた獵期の反省を基に、何ができて何ができなかったかなどを詳しく検証し、その上で、できなかった欠点の修復と、あくまでも自分に合った獵法を構築することである。

迎え来る獵期が充実した素晴らしいものを望むのであれば、第一段階は仔犬選びからではなからうか。

私が迷わず「猪犬作りから始めて」と前置きしたのは、何度も説明しているとおり、猪獵は犬次第であるからだ。いかに経験を積んだベテランの猪獵人であったと

しても、獵期が終わった次の週くらいから猪犬訓練の計画をきちんと立案することである。

過ぎた獵期のこと強く残っているうちに、犬たちと自分の反省を柱にして要点を忘れないようにまとめ、できなかったことをできるようにするための修復作業を行うのである。できるようなところが目的なので、その大胆な進化と改革を、まず断行することである。

もし、この煩わしい修復作業を怠ったとしたら、どんな猪獵の名人であったとしても、迎え来る獵期は間違いなく惨めな結果に終わると思うのである。

来る獵期を大成功で心より納得し思いっきり楽しめるものにするためには、まず狩獵の原点ともいえる。そして、はるか先の獵期に向かってバラ色の夢を大きく抱き、確実に追うことで、仔犬を名猪犬にしてほしいものである。

仔犬は実に正直なもので、主人の愛情のかけ方次第で必ずその期待に忠実に応えてくれる。長かる

うと暑かろうと、大切なオフシーズンなのだから、どんな苦勞も乗り越え、仔犬仕上げに励むことである。私の体験からすれば、仔犬訓練はなかなかの曲者で、思いのほか難しいことである。

常識で考えれば、名犬なくして頂点付近の激戦は完勝できない。同様に仔犬訓練を見事に乗り越えられなければ、名犬はない。

そういう考えを基に、猪獵の原点は仔犬の訓練であり、その道を正しく順を追って登って行けば、必ず猪獵の上級編に突き当たり、さらに追い求め、挑戦し続ける先には頂点がある。

私はそんな途方もない険しい長い獵道に、ただ一本の近道を構築して、万人がより早く簡単に、しかも安全に往来できるようにしたいのである。

繰り返して登り続けて来たこの一番良い道を、分かっていただけいばかりにしつこく説明しているのだが、なかなか聞いていただけのないのも事実で、思案していると

猪獵や猪犬作り、そして仔犬訓

練などは、猪獵人それぞれの考え方で成り立っている、いわば独立歩の牙城である。

だからこそ、ベテランの獵人ほど受け入れられないのだと思っている。だからといって、たった一つの言動によって仔犬を駄目犬にしてしまうのは残念で仕方がない。ましてや、自分で作り育てた仔犬たちであれば、それではあまりにも可哀想である。

本来ならば、仔犬たちの資質は本人が一番よく知っている。どうすればどんな猪犬になるかも含め、この仔犬たちの両親犬の芸を見てもらひ、共獵した上でじっくり語り合えばよいのかもしれない。

仔犬の訓練法を天下に公表し、仔犬たちが堂々と名猪犬に成長し、永く主人に可愛がってもらえるように思いついた後押しもしてみたい。

あくまでも、私の作った仔犬たちを私の信じる猪犬道に乗せて、名犬に登り詰めて行くための猪犬作りであり、名犬への道を書き留めておきたいのである。(つづく)